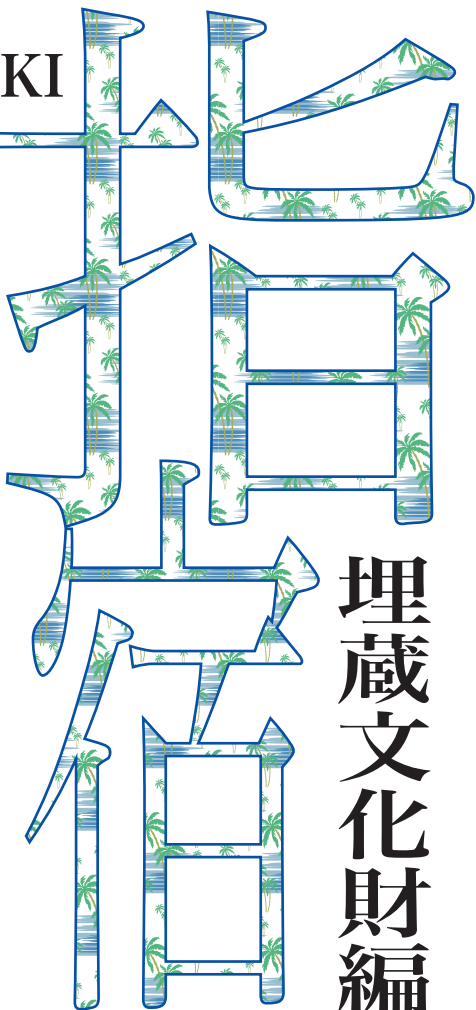


IBUSUKI

# 文化遺産図鑑



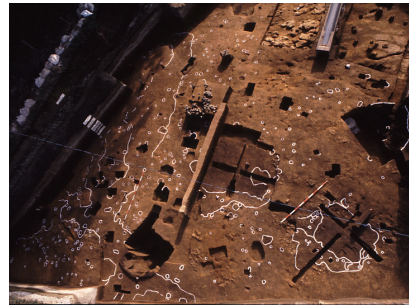
埋蔵文化財編

令和3年度文化芸術振興補助金  
(地域文化財総合活用推進事業)

指宿まると博物館実行委員会



文部省





# 指宿まるごと博物館構想について

## 例言

「指宿まるごと博物館構想」とは、指宿市全体を博物館ととらえ、市内にある文化財や自然、産業、郷土芸能、伝統行事、イベント、各種施設等の「指宿の宝」すべてを貴重な博物館の展示品として位置付ける考え方です。そして、これら市民共有の財産である「指宿の宝」を守り、継承し、活用しながらまちづくりや人づくりを生かしていく考え方やその実践のことを指します。

指宿まるごと博物館実行委員会は、平成23年に設立されました。事務局は指宿市教育委員会歴史文化課（指宿市考古博物館、時遊館coccoはしむれ内）に置き、前記の構想を推進する拠点として機能しています。設立以来、郷土芸能の記録撮影、公開、冊子の作成や文化財マップの作成、企画展の開催など様々な事業を行って参りました。

今年度は、指宿市内に点在する遺跡に焦点をあて、『指宿文化遺産図鑑（埋蔵文化財編）』を作成いたしました。地中にある・あった遺跡の情報を共有することは非常に困難です。しかし、まずは遺跡の場所や時代、どんなものが出たか、といった遺跡を知るための手引きとして活用していただきたいとの願いをこめて作りました。

今後も、指宿まるごと博物館構想にご理解・ご協力賜りますとともに、市内に点在する「指宿の宝」が、地域の誇りとして郷土愛を育むものとなり、保存・活用されることを願います。

1 本書には指宿市に点在するおよそ120箇所の埋蔵文化財包蔵地のうち、比較的資料が蓄積されているものをピックアップして掲載した。

2 本書の編集は指宿まるごと博物館実行委員会が行った。

3 本書に示した遺跡の範囲は、概略的なものであるため、詳細については、指宿市教育委員会歴史文化課へお問い合わせください。

4 遺跡の情報についてさらにお調べになりたい方は、「全国遺跡報告総覧」にアップロードされた発掘調査報告書をご覧ください。

# 指宿橋牟礼川

日本初！縄文時代が弥生時代よりも古いことを証明した遺跡

## 遺跡



指宿市考古博物館  
時遊館COCCOはしむれ

### 橋牟礼川遺跡とは？

橋牟礼川遺跡は大正5年に指宿出身で当時旧制志布志中学校（現県立志布志高等学校）の生徒である西牟田盛健によって遺物が表採されたことを契機に遺跡の存在が明らかとなりました。遺物は現在も遺跡公園内を流れる橋牟礼川の露頭で採集されており、この小河川が遺跡を東西に横断する形で流れていることから、遺跡発見につながりました。その後、喜田貞吉が山崎五十磨に依頼するかたちで、大正6年に発掘調査が行われました。



遺跡公園の中央を流れる橋牟礼川

大正7・8年には京都帝國大学の濱田耕作、長谷部言人らによる本格的な学術調査がおこなわれました。この調査では、火山灰層を挟んで下層から縄文土器、上層からは弥生土器が出土しました。このことから、弥生土器よりも縄文土器が古い時代のものであることが国内で初めて実証された遺



火山灰で埋もれた畠跡

跡として知られています。大正13年には、くにしていしせき国市指定史跡に指定され、昭和53年には、しせき史跡保存のための2.36haの公有地化が完了しました。

その後、くにしていしせき国指定史跡に隣接する北西側の土地からJR指宿駅付近に至る範囲までとちかくせいりじぎょう土地区画整理事業がおこなわれることとなりました。この事業に伴い、昭和61年から平成3年度まで、深さ1.5m以上の掘削を伴う道路部分と下水道が敷設される部分においてはつちうちよま発掘調査がおこなわれました。

こふん古墳時代の地層からは、150基を超えるたてあな竪穴建物跡やかいづか貝塚、



須恵器台付長頸壺



こもちまがたま  
子持勾玉



すえきたかつき  
須恵器高杯



すえきはそう  
須恵器罌



ています。

橋牟礼川遺跡は開聞岳の噴出物である青コラ火山灰、紫コラ火山灰によって被害を受けた火山災害遺跡として知られています。

青コラ火山灰は7世紀後半、紫コラ火山灰は貞観16年3月4日(西暦874年3月25日)の火山噴火であることが示されており(成尾1992、永山1992、下山1992・1993)、古墳時代から平安時代へかけての生活様式や文化変容について、火山灰層

土器集中廃棄所が検出されています。遺跡範囲内において、道路建設予定部分のみを調査対象としたのですが、膨大な量の遺物が出土しており、現在も整理作業が続けられています。出土遺物のほとんどは、成川式土器と呼ばれる土器類で占められています。須恵器や子持勾玉、青銅製鈴なども出土しています。九州南部を代表する古墳時代集落として位置付けられ



平安時代の皇跡



古墳時代の竪穴住居群



という鍵層を用いた検討が可能となっています。  
 特に紫コラ火山灰の被害については、掘立柱建物跡、貝塚、  
 皇跡、河川などが火山噴出物だけでなく、火山噴火に伴う  
 土石流堆積物によって埋没している状況などが確認されています。  
 この状況が『日本三代実録』に記された内容と一致することから、  
 文献の内容と災害内容を対比できる遺跡としても知られています。

今

和

泉

島

津

家

〜篤姫の父が眠る墓所〜

墓

所



### 遺跡の場所

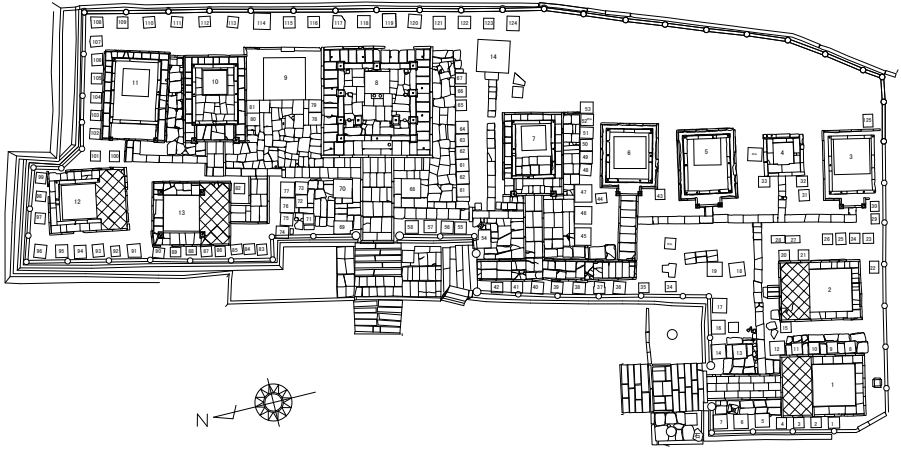
今和泉島津家墓所は、指宿市岩本にある江戸時代に今和泉を治めたお殿様の墓地です。JRさつま今和泉駅から歩いて10分の場所にあります。

岩本地区は、江戸時代において鹿児島藩一門家の一つである「今和泉島津家」の本領の中心地でした。岩本には、「今和泉島津家本領本宅跡」や菩提寺である「道熙山寿祥院光台寺」が置かれたほか、「今和泉郷の郷社」「中宮大明神（現・豊玉媛神社）」があります。今和泉島津家本宅の周辺は、直参の武士が住まう麓集落が形成されていました。墓所は、岩本の南側の台地の下にあります。墓所の周



初代・忠卿の墓 (宝篋印塔)





今和泉島津家墓所 平面図

辺は今和泉島津家臣団の墓地となっており、山間部に向かって多数の墓石が置かれています。

### 今和泉島津家とは？

5代鹿兒島藩主島津継豊の治世に、先代藩主島津吉貴の命によって、一門家の整備が行われました。この際に、中世に断絶した「和泉家」が再興され、延享元（1744）年に設けられたのが今和泉島津家です。

今和泉島津家は、指宿郷岩本、池田のほか、大隅半島にも合わせて1万3千石以上の所領地を持つ大名クラスの家でした。



今和泉島津家墓所内で採集された石製の香灯台。島津家家紋の「丸に十字」が陽刻される。

## どんな道跡?

今和泉島津家墓所は、今和泉島津家初代当主島津忠卿から、6代当主島津忠冬までの歴代当主とその家族が葬られていています。

墓所は、南から北に向けた谷部分を埋め立て、石垣で囲み造成した上に設置されています。初代当主・2代当主・2代当主室の墓石



初代・忠卿の墓石が安置されていた霊屋を再現。

は「宝篋印塔」と呼ばれる形の墓石を用い、それ以降の10基の墓石は五輪塔、1基は石廟と呼ばれる形です。今和泉島津家墓所の特徴は、次のようになっています。

①敷地内では初代当主忠卿の墓石が最大規模であること。篤姫の実父5代当主島津忠剛の墓石



住所：指宿市岩本 3032-1・2・3、3033  
JR 薩摩今和泉駅から徒歩 10分

これらの特徴からは、今和泉島津家は、墓所のつくりをとおして、家の始祖である初代当主を頂点として、これを崇拜する姿勢を示すと同時に、今和泉島津家の成り立ちを外部に示していたことがわかります。

はそれより大型であるが、墓の敷地を別にしてのこと。  
②13基の墓のうち、10基に墓石を覆う霊屋が造られており、初代当主の霊屋が最も大型であること。  
③今和泉島津家の当主は数代ごとに島津宗家から養子入りしている。このため、今和泉島津家の人々は血縁関係でグループに分けることができる。一方、墓石は細かな特徴から4つのグループに分けられる。墓石のグループは被葬者の血縁関係と一致していること。  
④墓石は③のグループごとにまとまった配置にしようとしていること。

# 弥次ヶ湯古墳

日本列島最南端の古墳

## 遺跡の場所

弥次ヶ湯古墳は、指宿市十町じゅしゅつしまちにあり、県宮弥次ヶ湯団地の敷地内で見ることができるとされる日本列島最南端の古墳です。指宿駅からは歩いて15分の場所に位置します。

## 弥次ヶ湯古墳の発見

弥次ヶ湯古墳は、指宿市十町小字敷領しきりょうに広がる敷領遺跡地内から発見されました。遺跡は山裾やまそから海岸に向けてゆるやかに傾斜する海拔6m前後の火山性扇状地の末端部にあります。

古墳は、その大部分が7世紀後半の開聞岳火山灰「青コラ火山灰」に覆われており、墳丘上部はすでに後世に削られていました。墳形は「円墳」と呼ばれる丸い形をしたもので、墳丘の直径は、約17.5mです。

残存する墳丘の高さは最大で約1.3m、周溝は、幅2m前後、深さ約40〜60cmで、埋土からは、甕、鉢、



古墳周溝から出土した土器群



古墳の周溝から出土した壺



古墳の周溝から出土した甕



弥次ヶ湯古墳の復元模型



住所：指宿市十町●●  
JR 指宿駅から徒歩●分

弥次ヶ湯古墳に葬られたのはどのような人物なのでしょう？今後の研究に期待がかかります。

近年の発掘調査では、弥次ヶ湯古墳から約700mの距離に、弥次ヶ湯古墳が作られた時期と同時期の集落が見つかっており、集落とお墓の関係性について検討できるようにになりました。

壺、高杯、埴、ミニチュア土器など800点の土器片が出土しました。お墓に葬られた人が眠る埋葬施設は、すでに削り取られてしまった可能性が考えられています。

弥次ヶ湯古墳が造られた時期は、出土遺物の年代観より、5世紀後半から6世紀前半と推定できません。古墳の「空白地帯」と呼ばれていた薩摩半島において、弥次ヶ湯古墳の発見は、古墳の分布領域を書き換えると同時に、古墳時代の薩摩半島の社会像に再考を迫る契機となりました。

# 松尾城跡

鹿兒島湾に面した海城と山城



## 遺跡の場所

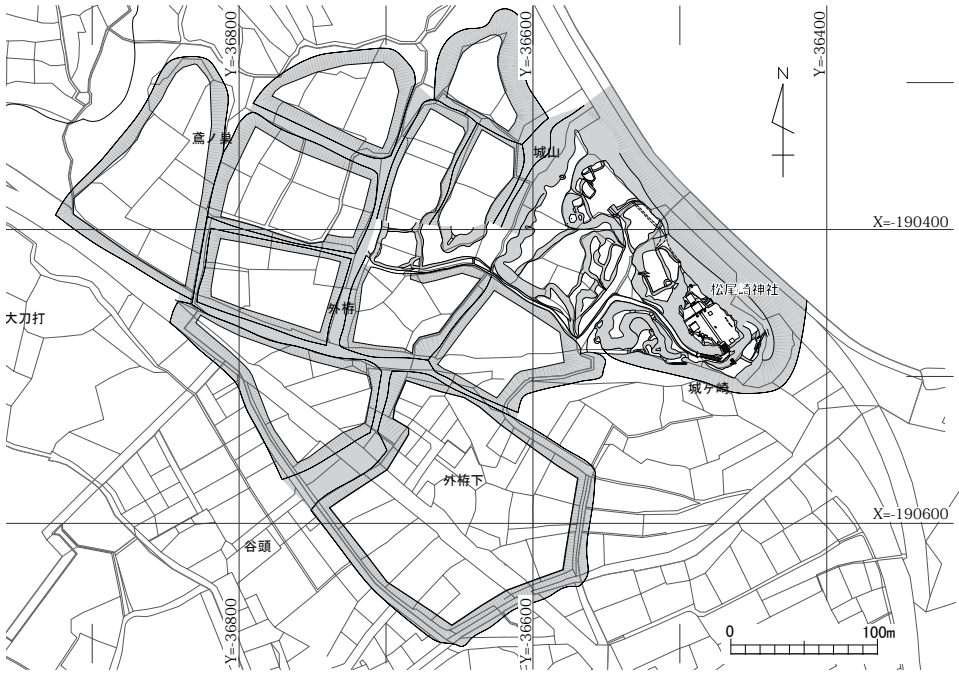
松尾城跡は、指宿市西方字城ヶ崎とその周辺を含めた丘陵上のエリアに所在する中世の山城です。JR宮ヶ浜駅からあるいて20分ほどの場所に位置します。

## どんな遺跡？

松尾城跡の東側は絶壁となっていて、鹿兒島湾に面しているため、山城という性格に加え、海城の性格もあわせもつといわれています。松尾城は、ほかの山城と同じように複数の曲輪（城内の区画）から成り立っており、どの曲輪の頂上も平坦になっています。国道226号線はちょうど曲輪同士を区切る空堀を通っており、また、JR指宿枕崎線は曲輪の間を走っているのです。

城内には防御用の土塁や武者走り、武者揃いといった施設が名残をとどめ、大手門と思われる場所も推定されています。城の築城時期は、現段階でははっきりとはしていませんが、指宿氏以来、指宿を治める武将が松尾城の城主となりました。鎌倉時代から室町時代にかけての城主は指宿氏でしたが、指宿を大隅守護の島津氏が

松尾崎神社の  
写真



領有してかしてから、松尾城の城主は次々と変わっていきます。

応永16年（1409）、指宿を領有していた島津元久が城代として阿多時成を松尾城に封じ、指宿氏は退去。その3年後には奈良氏が城番として入ってきます。しかし、奈良氏は島津久豊に倒されてしまいます。文明7年（1475）には、島津久継が松尾城の地頭となりましたが、島津氏が内紛を始め、文明8年（1476）に島津久継と対立していた島津忠昌が、禰寝重清らに松尾城を攻め落とさせ、指宿は禰寝氏の領地となった。

その後、指宿は再び島津忠昌の孫である勝久の領地となり、大永6年（1526）に地頭として伊地知重弦がおかれ、その後、頼娃の地頭を務めていた頼娃兼洪が、天文4年（1535）に指宿を攻め、家来の津曲兼任を地頭として指宿に派遣しました。

これ以降、天正16年（1588）に頼娃氏が守護職の島津氏によって他の領地に移動させられるまで松尾城の城主は頼娃氏の家臣が務めました。

# 水迫遺跡

日本列島における定住生活の先駆け

## 遺跡の場所

水迫遺跡は、鹿児島県指宿市西方に所在する後期旧石器時代の遺跡です。遺跡は、指宿市の北西部にある標高401mの清見岳から北東方向へ緩やかに伸びる山裾の東側端部に位置します。遺跡の所在する現地形は、標高約126mの舌状に伸びる尾根の東南側縁部にあたります。

## 水迫遺跡の発見

平成5年に鹿児島県教育委員会が行なった分布調査で遺跡の存在が明らかになり、平成8年には確認調査によって、縄文時代早期の遺物が出土する地層が確認されました。後期旧石器時代の集落は、緩やかに東南側に延びる平坦地上で発見された。水迫遺跡には、縄文時代中期から後期旧石器時代までの各時期の火山灰



水迫遺跡の復元住居



層が堆積しており、年代を推定する上で重要な役割を果たしています。

弥生時代中期から後期旧石器時代までの複合遺跡です。弥生時代では、多量の土器片が出土しました。縄文時代では、早期〜草創期の遺物や遺構が見つかり、新型式の「水迫式土器」も出土しました。また、後期旧石器時代では、国内で初めて、竪穴建物跡や炉跡、道跡、杭跡などがまとまって見つかりました。これらの遺構群は、定住化へ向かう過渡期の集落の姿を示しているものと考えられます。



敷

領

遺

跡

〜古代指宿の中心地〜

## 遺跡の場所

敷領遺跡は、指宿市十町小字敷領にあります。遺跡のほとんどは住宅地にあるため、見た目で遺跡の雰囲気はわかりませんが、古墳時代から古代の重要な遺構・遺物が発見されています。JR二月田駅から歩いて20分ほどです。

## どんな遺跡？

敷領遺跡では、西暦874年の開聞岳噴火で埋もれた水田、奈良〜平安時代の建物群や墨書土器、古墳時代の焼失住居跡、弥生時代後期の竪穴住居跡などが発見されています。

平成8年以来、指宿市教育委員会による継続的な発掘調査が行われており、お茶の水女子大学・鹿児島大学による発掘調査も実施されてきました。

発掘調査の中でもっとも古いものは、平成8年に実施した公宮団地の建て替え（現在の県営敷領団地）による発掘調査です。この調査によって開聞岳の火山灰で埋もれた平安時代の水田が広がっていることが発見され、平安時代に敷領遺跡に暮らしていた人々は稲作を行っていたことがわかったのです。さらに、下の地層を掘り下げると、掘立柱建物跡（地面に穴を掘って柱を立てて造られた建物）、総柱の高床倉庫跡、割れた須恵器を硯に使用した転用硯や「糲」「智」といった文字が書かれた墨書土器などが出土しました。



火山灰で埋もれた土器



いしくらぶ  
右組炉にかげられた鍋

敷領遺跡で発見された3号建物跡。写真（左上）のほぼ中央にカマドがあり、古代の鍋が置かれたままの状態で見つかりました。開聞岳の火山噴火による災害を知るための貴重な資料です。下の写真は建物内から出土した土器です。



だいつきなべ  
台付鍋



まるぞこなべ  
丸底鍋



まるぞこなべ  
丸底鍋



すえきちよぞうき  
須恵器貯蔵器



はじきつき  
土師器杯



すえきつき  
須恵器杯



平成8年に出土した鉄製甲臺



令和元年に出土した鉄製甲臺



住所：指宿市十町

なかでも「鉄製甲臺」と呼ばれる古代の古い(亀ト)に使用したと考えられる鉄製品の出土は注目を集めました。古代人にとって、政治的な判断は、古いによって決められていたため、古代の占いに使用された鉄製甲臺が出土したということは、なんらかの意思決定機関(古代の役所?)が、敷領遺跡に存在したことになります。

また、敷領遺跡のほぼ中央、中敷領地区においては、開聞岳の874年の噴火災害で埋もれた建物跡群がみつかりました。なかでも、平成26年の発掘調査で発見された3号建物跡では、開聞岳火山灰に埋もれた建物跡からカマド、石組炉などの調理施設、古代の鍋や須恵器貯蔵器や土師器の杯などが出土しました。これらの資料は、噴火当時(西暦874年)の食事様式を知る上で貴重な資料となっています。日用品が残されていたことから、被害にあった人々

は取るものも取りあえず噴火から避難したことが想像できます。

現在でも、敷領遺跡の発掘調査は進められています。市営敷領団地の建て替えに伴う発掘調査では、平成8年の発掘調査に続き2点目となる鉄製甲臺が出土しました。しかも出土地点は敷領遺跡の北部で、1点目の鉄製甲臺とは700mほど離れています。ほぼ同形である本資料は、敷領遺跡で古代祭祀が行われていたことを如実に示すものです。今後は鉄の成分分析や製作技法などについて研究の進展が期待されます。

岩

本

遺

跡

いわもとせき

〜岩本式土器の標式遺跡〜



### 遺跡の場所

岩本遺跡は指宿市の最北部、小牧台地上に位置する縄文時代の遺跡です。標高63メートルの鹿兒島湾に面した台地の端が遺跡で、阿多カルデラの北端、断層海岸の先端部に立地します。遺跡からは鹿兒島湾を挟んで大隅半島が遠望できます。周辺は遺跡が多く、南に小牧3A遺跡、北に尾越遺跡・露重遺跡などの旧石器時代、縄文時代早期などの遺跡が点在しています。

### どんな遺跡？

岩本地区県営畑地灌漑事業に伴って、指宿市教育委員会が調査主体となり、県内教育委員会の協力を得て、昭和52年（1977）6月から53年（1978）3月に発掘調査が行われました。



岩本式土器

発掘調査をはじめると、火山堆積物がたくさん見つかりました。上の地層から、開間岳の火山灰・池田カルデラの火山灰・鬼界カルデラの火山灰・権現山火山灰・薩摩火山灰・岩本火山灰・始良力



岩本式土器



出土した石器

ルデラの火山灰がほぼ水平に堆積していました。考古学者たちはこの地層を利用して、遺跡の変遷を検討しています。

縄文時代の土器は、岩本式土器を中心に隆帯文土器、前平式土器、押型文土器が出土し、石器では打製石鏃、磨製石鏃、石匙、石槍、石斧、石皿、砥石などが出土しています。



なかでも岩本式土器は、円筒形で平底。大きなバケツのような形をしています。

岩本式土器は、縄文時代早期の筆頭に位置付けられている土器です。円筒形の単純な形で口の部分にキサミで波状に形づくられています。ベンガラで赤色に塗彩するものもあります。

石器では、磨製石鏃や局部磨製の石槍、両面加工石槍の存在など、縄文時代草創期の特色を引き継いでいます。一方、輝緑安山岩や凝灰岩に周辺加工で楕円形や台形状に仕上げた石皿の使用は、後の時期にも引き継がれていくようです。

このように岩本式土器は、縄文時代草創期の伝統を引き継ぎながら、一方では新たな生活用具を生み出していることがみられるため、新たな環境に適應し、生活スタイルを創造し始めた姿を示しています。

# 大渡遺跡

南西諸島との交流を予す縄文遺跡



## 遺跡の場所

大渡遺跡は指宿市十二町大渡にあり、山川湾に面した台地上で、縄文時代後期から古墳時代の遺物が出土する複合遺跡です。

## どんな遺跡？

大渡遺跡は、昭和28年に国分直一氏によって、初めて発掘調査されました。指宿高校で教鞭をとっていた国分直一氏は、民俗学、考古学と幅広い研究活動を展開していた人でした。

昭和28年の発掘調査では、縄文時代中期の阿高式土器から縄文時代晩期に至る土器が出土しました。調査に参加したのは、国分直一氏、河口貞徳氏、重久十郎氏、河野治雄氏らで、調査地点は南向きの緩傾斜地であり、国分氏は、遺跡の中心が上位の平坦地にある可能性が高いと評価して

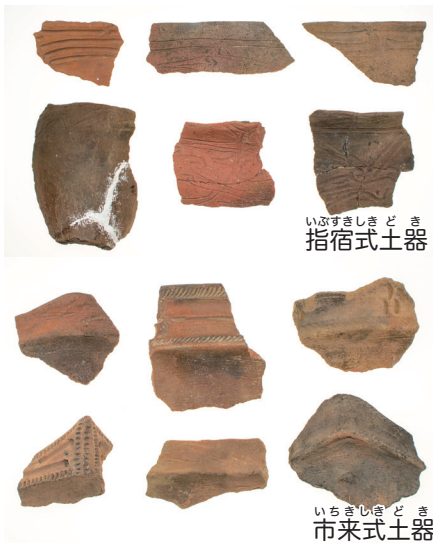


昭和32年調査風景

きたくねやまだいにけいしきどき  
北久根山第二型式土器



いぶすきしきどき  
指宿式土器



いちきしきどき  
市来式土器



いちきしきどき  
出土した市来式土器



第2号人骨



います。

昭和32年の発掘調査は、一次調査と二次調査にわたって実施され、昭和32年3月23日～4月1日に実施されました。調査に参加したのは、国分直一、河口貞徳、重久十郎氏の他、指宿高校郷土研究部でした。この発掘調査は指宿市誌編纂事業のため実施されたものでした。4から5体の人骨や縄文土器が出土しました。

一次調査の第1トレンチからは、2体の人骨が出土しました。1号人骨は、縄文時代後期以降の人骨である可能性があり、2号人骨についても、同一層からの出土であることから、縄文時代後期以降の人骨の可能性も考えられるところです。当時の発掘調査写真から



は、暗紫コラ（弥生時代中期）と考えられる火山灰ブロックが人骨上部に見られることから、弥生時代中期より新しい可能性は少ないものと考えられています。

また二次調査でも人骨が出土しています。この人骨は縄文時代後期の包含層からの出土とされますが、上層からの掘り込みであった可能性も考えられています。縄文時代の人骨は鹿児島県内でも貴重な事例であるため、今後の調査が待たれます。

人骨以外の出土遺物では、縄文時代後期の市来式土器の注口土器や尖底土器などがあります。特に、市来式土器の注口土器について

は、種子島の納骨遺跡にも似た資料が出土しています。本田道輝氏によると、この形の土器が分布するのは、南部九州を中心とする地域であり、その系譜など謎が多い土器となっています。また、国分直一氏は、尖底土器について、南西諸島の乳房状尖底と呼ばれる土器群の影響があった可能性について指摘しています。なお、1994年、指宿市南摺ヶ浜遺跡で、縄文時代晩期の土器とともに、宇宿上層式土器とよばれる南西諸島の土器が出土しました。このことから、縄文時代の終わり頃、指宿の人々が南島と交流を持っていたことがわかります。



# 成川遺跡

なりかわいせき

〜弥生・古墳時代の集団墓〜



## 遺跡の場所

成川盆地（成川マール）の西壁に立地しています。遺跡地は標高38〜73メートルの丘陵が東へ張り出した尾根の先端部南斜面で、地層は池田湖火山灰の上に開聞岳火山灰が堆積してできています。縄文時代、弥生時代、古墳時代にわたる複合遺跡です。

## 調査の経緯

昭和32年（1957）山川港埋立工事用採土工事により発見され、数日間の調査がされました。翌33年に文化財保護委員会（現文化庁）が発掘調査を行い、その後昭和55・56年には国道226号線成川バイパスにおける昭和55年の調査では、祭祀遺構の西南に隣接する地域で山ノ口式土器を出土する竪穴住



居跡8軒が発見されました。これが祭祀遺構を残したものと集落であろう。竪穴住居の形態は隅丸方形が主体で、ほかに円形のものも1軒あります。床面積は10〜35㎡程度と小ささまでありますが、このなかには周辺にベッド状の高まりのあるものも4軒あります。中央に炉穴のあるものもみられるが、柱穴の配置ははつきりしません。住居内外から多くの土器・石器などが出土しています。

#### 遺構と遺物

最初この地に出現したのは、弥生時代中期後葉の祭祀遺跡です。尾根の南東端山麓に、100㎡余の面積の範囲に輝石安山岩質の板



石3基を、根固石を用いて強固に立て並べ、その南側には幅1m、長さ5m余の範囲に安山岩礫を配しています。立石には、それぞれ地元のもの、九州から移入された丹塗り研磨した須玖式土器が供献されています。これは祭祀遺跡と考えられるもので、同様な例は、枕崎市松ノ尾遺跡や対岸の大根占町山ノ口遺跡にもあります。

開間岳が噴火したのは、この祭祀遺構が形成された直後です。根固めの立石が3基ともに中ほどで折損転落しているのは、爆発の衝撃によるものと考えられます。

土器は在地の山ノ口式土器を主体としますが、北九州系の丹塗土器、瀬戸内系の凹線文土器など外来系のものもあり、石器には磨製石鏃・磨石・石剣・砥石などがあり、ほかに有孔・容器状などの軽石製品もあります。

祭祀遺構が造られた時代である弥生時代後期には、埋葬が行われ



# 尾長谷迫遺跡



## 遺跡の場所

尾長谷迫遺跡は、指宿市西方尾長谷迫・尾長谷川迫に所在します。遺跡は標高40m前後の海に面した台地上に立地する縄文時代から近世にかけての複合遺跡で、特に古墳時代の鍛冶遺構が発見された遺跡として知られています。



ふいごの羽口

## どんな遺跡？

昭和60年、県営畑地帯総合土地改良事業に伴い発掘調査が行なわれました。古墳時代の竪穴住居跡2基が検出され、うち一つに鍛冶遺構が確認されました。竪穴住居の内部には、中央部に鍛冶炉が設けられ、鉄滓、金床石、砥石、高杯の脚部を転用したふいごの羽口等が出土しました。



けんしゆつ じゆうきよくん  
発掘調査で検出された多量の住居群

たてあなじゆうきよくん  
 竪穴住居跡の性格については、日常雑器も出土していることから、「生活の一環としての鍛冶行為」と考えられています。橋牟礼川遺跡の竪穴住居からも鉄滓、金床石、砥石を伴う鍛冶遺構が検出されている他、豊富な鉄器類が出土しており、当時、指宿においては、鍛冶技術が定着していたことをうかがえます。なお、鉄素材には、砂鉄と鉄鉱石の2つの可能性が指摘されていることから、今後、製鉄遺構の発見や鉄素材の入手の問題など解決するべき課題も多々あります。





西

多

羅

ヶ

迫

遺

跡

## 遺跡の場所

西多羅ヶ迫遺跡は、指宿市大字小牧字西多羅ヶ迫に所在し、標高103メートルの幅の狭い尾根上に位置しています。遺跡が立地する尾根の北西面は、緩やかな斜面であり鹿児島市喜入の帖地方向へ延びています。また、南東側には浅い谷があります。

## どんな遺跡？

西多羅ヶ迫遺跡では、縄文時代中期～後期、早期、草創期と後期旧石器時代の細石刃文化期、A T上位のナイフ形石器文化後半期、A T下位のナイフ形石器文化前半期、後期旧石器時代初頭の遺構や遺物が出土しました。

西多羅ヶ迫遺跡は、尾根頂上部に位置しており、北西と南東方向が谷地形によって挟まれています。縄文時代中期・後期に帰属すると考えられる北側斜面で検出されたヒット群は、土器の出土が全くないことや遺構の検出範囲から、集落とは異なる性格が想定されています。

縄文時代草創期については、遺構は未発見ですが、無文土器が出土した範囲がなんらかの窪みであることから、集落の一部を検出している可能性も考えられます。

後期旧石器時代の細石刃文化期について、細石刃関連遺物が細石刃核が主体であるため全体像は判りません。ただし、細石刃核の出土量に対して細石刃が皆無であることからこの場所が、細石刃



出土した石器



の製作の場として利用されているものと考えられます。AT上位のナイフ形石器文化後半期については、ジャスパーやシルト質凝灰岩の石器石材を搬入し、石器を製作し、その石器を使った場所であったと考えられます。AT下位のナイフ形石器文化前半期については、石器製作とその使用する場が想定できません。後期旧石器時代初頭についても、石器を製作し、その石器を使用した場所です。両時期とも、近隣で良質なジャスパーを産出した「原産地遺跡」としての性格が窺えます。

